７

会社勤めはやめていた靖は占いをやる傍ら株の取引にも挑戦していた。最初は“彼女”からのデータ不足からか損失が続いた。ある程度アバウトな要素の入る占いとは違い、ハッキリと数字が出るので厳しかった。

　しかし、３ヶ月経ち半年経つと“情報”も整理されてきたのかプラスの数字が続くようになって来た。“情報”をもとに取引してるので、この実態を知れば“インサイダー取引”になるのは否めなかった。が、その事実は誰も知る由も無かったので明るみに出る事はなかった。

　１年後には株での利益もかなりの金額になってきた。これをどうに社会に還元すればいいのか、皆目分からなかった。単純に考えればどこかへ寄付すればいいのかと思ったりした。でも大金を手にするともっと増やしたいと欲も出てきた。彼女の言っていた事を実行するのかどうかあやふやな気持ちのほうか強くなってしまった。

　そんな気持ちでいる自分に彼女の“言葉”は何も無かった。このまま突っ走って行っていいのだろうか・・・。そんな時ふと思いついた事があった。起業して会社にして社員を雇えばささやかながら“還元“できるのじゃあないのかと。株式会社にして税金を払いさらに株式配当を出せばそれも社会に貢献してる事になると考えた。

　相変わらず“言葉”は伝わってこなかったが、否定もされてないのだから会社を立ち上げようと決心した。そしてそれからは起業の本などを読み始めて研究し出した。とは言え自分に出来る事は、物作りではないし結局今やってる株の関係の会社を作るのがさらなる成功への一歩だと思った。ファイナンシャルアドバイザーの勉強も始めた。占いは廃業するしかないと考えた。これのネタでまた週刊誌あたりに書きたてられるかもしれない。そうなる前に今井由紀さんには連絡しておこうと思った。確か初めて来た時に名刺を貰ったはずだった。

８

あるオフィスビルの一室に靖は「OKファンド」と言う看板を掲げ社員も２人雇い投資顧問会社を設立した。そしてオフィスには社長室も作られ一区画で仕切られた。さらに会社のオフィスのとなりの一室も靖が借りてそこを住居にした。社長室と隣り合わせになる配置だった。彼女の“言葉”が届くように考えたのだった。

　とは言え当然最初からお客さんが付くはずも無かった。週刊誌のネタとして扱ってくれるかとも期待していたが、思いのほか取材が来なかった。占い師が株関係の実業家になると言うのは冷めた目線で見られていたのだろう。一寸面白い話題だったが、それ以上に大きなニュースがあったせいもあったのだろう。

　そんなこんなで会社は厳しいスタートになった。取り敢えずは預金を取り崩して行く事も覚悟していた。実績を作ろうにも顧客がいない事には話しにならない。もっとも実績云々以前にファンド商品を売り出さなければ話にならない。今までの蓄積した情報から予め考えていた幾つかの商品を売り出そうと動き始めた。

　一占い師から転身した靖だったので最初はどこの金融証券関係会社へ行ってもあまり真剣には対応してもらえなかった。でも一応、商品資料を営業先に置いてきた。目を通してくれるか分からなかったが自信のある商品だったのでいつかは目に止まるかと期待していた。

　「ＯＫファンド」の社員２人は１人は事務担当の女性の山路さん。もう１人は証券会社に勤めた経験のある男性の豊岡さん。２人とも靖より年上の真面目そうな人達だった。靖は年下で金融証券関係の会社経験もない社長だったので２人を信頼する態度を示そうと意識して接した。実際頼りにしていたので自然にできたが。ファンド商品の開発にはそのうち豊岡さんに加わってもらおうと考えていた。勿論“彼女”からの情報が最優先だがやはり経験者の意見も取り入れたほうが良いだろうと思っていた。また豊岡さんの意見の入った商品のほうが彼自身の営業にも力の入れようが違うはずだろう。

　会社としての営業を始めてから数ヶ月が経った頃、ＯＫファンドにお客様が付いてきた。次第次第に靖のファンド商品の良さが浸透して行った。そして投資関係の業界内で噂が噂を呼んで一躍「ＯＫファンド」は脚光を浴び始めた。そうなると雪ダルマ式に顧客が増えて急成長会社になった。社員も２人から一挙に７人に増やした。と言ってもまだ個人会社に毛が生えた程度の状態だったが株式会社ＯＫファンドとして行く行くは株式を上場しようと考えていた。着実な業績を上げて小さいながらも配当を出せるようなそんな夢を抱いていた。靖は飽くまでも投資顧問会社としてやってゆくつもりで、企業買収とかにはあまり興味がなかった。

　しかし業界関係者との交流が増えるにつれて会社を大きくすると言う欲望が沸々と湧いてき始めた。靖は自分でも一抹の不安を覚えたが“彼女”からの否定的な言葉は伝わってこなかった。敵対的企業買収にならないよう慎重に会社を選べば交渉は上手く行くと周りの社長たちも言っている。自分の会社も大きくなればそれだけ社会へ還元することも大きくなるはずだと思うようになっていた。

９

そんな頃、今井由紀さんが訪ねてきてくれた。たまには電話で話すこともあったが、お互いに忙しく会うことはなかった。しかし何故かお互いに気にし合う仲になっていた。狭いスペースながら社長室に入ってもらって話し始めた。

「どうも中々会えなくて、見えてくれて嬉しいです」と靖は笑顔で迎え入れた。

「立派なオフィスですね。岡島さんがまさかこんな社長になるなんて驚いています。出会った時からのギャップが凄いし」と靖を頼もしそうに見つめていた。

「いえ、まだ社長の卵みたいなものです」

「それってまだヒヨコにもなっていないという事？」と茶目っ気たっぷりに応じた。

「いやー、由紀さんて面白いですねえ。さすが新聞社にいるだけありますね。確かに自分でも驚いているんです。今の自分を想像した事は全くありませんでしたし。あの訳の分からない投書をした辺りから急に人生が変わったのは確かです」と遠くを見つめるように言った。

「成るほど、そうですか。目の前でサクセスストーリーを見てるようで凄い興味深いです」

「ン億円の宝くじに当たったようなものですかねえ・・・」

「宝くじに当たるのも至難の業ですけれど、何度も何度も当て続けてるのはもう言葉では言い表せないくらいですよね。やはりあの手紙に関係があるのでしょうか？本当に宇宙人がいて電波情報をキャッチしていれば凄い情報も入って来るでしょうし」

「そうかも知れないですよね」と、あっさり靖が言ったので由紀は面食らった。

「えっ？　それってあの投書は本当だったという事ですか・・・」

「あ、済みません・・・冗談です冗談です」と、身振り手振りを交えて慌てて否定した。ただ由紀さんには、いずれ話そうかと考えていた。

「脅かさないでくださいよ。思わず記者魂が刺激されました・・・」

「どうも変な言い方をして・・・。ところで話は変わりますけど、今度一緒にお食事でもどうですか？」

由紀は唐突に言われたのでやや面食らったが、前から予感はあった。

「あ、そうですか・・・。そうですね、有難うございます。ゆっくり話したことって殆どないですものね」

「ありがとう、嬉しいです。本気にしていいんですよね」

由紀が頷くのを見ると靖は続けた。

「そうすればまた後で電話するのでその時に予定を決めましょうか」

「はい、分かりました。楽しみにしてますね」由紀の笑顔が一層可愛らしく靖の目に映った。